

用語を簡条書にして、一、二行の解説が加えられている。

一七三四年版のオランダ語版は、大鳥蘭三郎の蔵書に類似し、第一図を除き、他の全図を巻末にまとめて整本してある。一七四八年版、一七六五年版には、一七三二年版と同様、舌の盲孔には唾液分泌管が開口する図が画かれ、胸管には、その左に訂正図が附記されている。それゆえ、譜図は、訂正したことを考慮せずに、訂正前のものと訂正後のものとを適当に組み合わせて用いていたようである。

これらの『解剖学表』について、細かい点を口述する。

(名古屋大学医学部解剖学第一講座)

スワドリング (Swaddling) と

当時の小児科医たち

大野 晏 且

「子どもが母親の胎内から出るやいなや、そして手足を動かしたり伸ばしたりする自由を樂しむようになるやいなや、人は子どもに新たな束縛をあたえる。産着にくるみ、頭を固定し、足を伸ばさせ、手を体のわきに垂れさせて、寝かせる。あらゆる種類の布や帯を巻きつけられて、位置を変えることもできなくする。」(ルソー『エミール』樋口謹一訳におけるビュフォン『博物誌』からの引用)

このように新生児に対し、生後四ヵ月から九ヵ月に渡って念入りに二時間もかけて、産衣の上からリンネルの細帯や紐で堅くグルグル巻きにし、丁度、小さなミイラか繭のように縛り、身体を動かす自由を奪う不合理な緊縛的育児習俗が、スワドリング (Swaddling) に他ならぬ。

子どもにも最も親密な眼差しで接すべき小児医学とスワド

リングの係り合いが、アメリカ小児科学アカデミーのシンボルマークとしてスワドリリングされた子どものメダリオンを採用したのは象徴的である。事実、奇しくも小児医学の興隆とスワドリリングの衰退は逆相関をなしている。

ソラノスが『産婦人科論』で身体の正しい調和のとれた発達を保持するために、スワドリリングの有効性を推奨して以後、ガレノス（一二九～一九九）、アヴィケンナ（七八〇～一〇三七）、バゲラルド（？～一四九二）、メトリンガ（？～一四九二）、レスリン（？～一五二二）、ローフェンベルク（？～一四五六）、セイント・マルス（一五三六～一六二二）、モリーソー（一六三七～一七〇九）等々の歴代の医師たちは、小児疾病書や医詩（*Pediatric Poems*）を通して、身体の整形、矯正、防寒等の理由からスワドリリングの有効性を力説した。

十六世紀におけるウィルツやフェラリウス、十七世紀のキレット、ロック等が早くからスワドリリングの有害性を訴えたが、小児医学の立場からスワドリリング廃止の声が上がったのは、十八世紀になってからである。

C・カドガン、ネルソン、ローゼンスタイン、ブカン、

クック、スミス、アームストロング、アンダーウッド、ヘバーデン、オリベット、デウィー等がラジカルにスワドリリングを糾弾した。

就中、予防医学に足跡を残したW・ブカン（一七二九～一八〇五）が、『家庭医学』（一七六九）で述べている、当時の医師たちが子どもの扱いに無関心であり、病気の子どもの診察を断ったというエピソードの裏に、もの言わぬ子を相手にする時、臨床的に機能できない当時の小児医学の水準の限界を見る。

このようにスワドリリングの衰退し廃止された年代と小児医学が専門的な立場から発言を開始した年代は、ほぼ一致する。

さらに、十八世紀前、医師たちが子どもを自立した完全な人間と見なさず、メカニカルベイビーに喩え、その形、性質を自由に変えられる制御可能な対象と考えていたことが、スワドリリングに歴史的に対応して来た彼らの言説から判断できる。

この姿勢は、現代医学における思考の二面性に重なりを持つ。一つは科学的（客観的、普遍的、分析的、論理的）

側面であり、他は臨床的（相対的、自己的、総合的、感覺的）側面である。現代に至る小児医学も、この差違の中で葛藤しつつ、人間学としての道を摸索中であるといえる。

いづれにしても、死の恐怖と不断に直面し虚弱なわが子が健やかに育ってほしい親の素材であるが切実な願望が、スワドリングを必要とさせ、存続させたといえよう。現代小児医学においてスワドリングが再評価され、特に小児看護医学でスワドリングによる運動の抑制が乳幼児の鎮静化に効果的であることが報告されているのもその故である。

（東京学芸大学附属大泉小学校）

腹腔動脈の解剖学的研究の

歴史（一）

— ハラーを中心に —

澤野 啓 一

腹腔動脈は決して微小な構造物ではないが、腹腔内臓の裏側（背側）に存在し、かつ腹腔の背壁に埋没した短い物であるため、解剖学的探索が難しく、その重要性にもかかわらず、近代解剖学の創始者ヴェサリウスによっても発見されることはなかった。

Michels（一九五五）によれば、腹腔動脈の最初の発見（記載）は Haller（一七五六）の“*Icones Anatomicae*（以下略）”（以下『ハラー一七五六乙』と略記する）である。

ハラーは、他の引用者によってしばしば『人体解剖図譜』もしくは“*Icones Anatomicae*”と略称されている解剖学書全八巻を、一七四三年から一七五六年にかけて刊行している。Michelsの引用した書名には、後に述べるような理